

# 高橋先生の人と学問

外 崎 忠

敬愛する高橋正先生が2004年3月に千葉商科大学商経学部を定年退職されました。政治学と国際関係論をご専門とする先生の「人と学問」について、法と経済の学際的研究を専門とする私が担当させていただくことには多少のちゅうちょがありました。にもかかわらず筆をとったのは、私が先生を尊敬し、学生の指導に対する熱意から多くを学び、さらに先生の立派なご自宅で奥様や友人たちとたびたびワインをごちそうになり、実に楽しいときを与えられたことに対して心からお礼を申し上げたいと考えたからである。

以下に、先生の簡単な経歴（詳細は後述）、学生の指導、本学への貢献、および学問について述べる。

先生は、1933年（昭和8年）4月7日、東京・日本橋に生まれ、1956年に早稲田大学政治経済学部をご卒業後、東京新聞にご入社されました。1971年から1974年までモスクワ支局長、1974年7月には外報部次長にご就任されています。そして、1985年4月、千葉商科大学に政治学・国際関係論の助教授として採用され、1987年4月に教授にご就任されました。

先生は、「趣味はワカモノ」といっているように学生の教育には実に熱心で、その指導には「サンマ（3マ）主義」をもって臨んでおられました。先生によれば「3マ」とは、テマ（労力）、ヒマ（時間）、ゲンナマ（資力）のことであるという。つまり、学生の指導にはテマとヒマをかけ、できるならゲンナマも注ぐべきであるということらしい。私が先生を教育者として尊敬し、見習っているのは、先生がこの「サンマ主義」を実行していることを知っているからであります。たとえば、学生に自分の研究室を開放し、毎年、海外に出かけて学生の身分では会えないような

重要人物にも逢わせ、ゼミ生（卒業生も含む）によるクリスマスパーティも恒例でした。このような先生の愛情と「サンマ主義」により高橋ゼミ生たちは優秀な学生が多く、私の担当している「経済学特殊講義（教材が日本経済新聞）」でもゼミ生たちは活発に発言していました。法科大学院に合格した卒業生もいます。

先生の本学への大きな貢献としてどうしてもあげなければならないのは次の二点であろう。

まず、1993年7月から8月の40日間、第一回夏期語学研修（フロリダ大学経営学部）に学生を引率して参加されたことである。本学にとって最初の海外研修だったので、自己負担で参加された奥様ともども大変なご苦勞をされたようであります。ご夫妻のこのときのご苦勞が、その後、10次にわたる夏期語学研修の実質的レールを敷いたといえるでしょう。先生の長い海外生活が本学の国際化に大いに生かされたことになります。

次に、本学は現在、上海の立信高等会計専門学校（単科大学）と提携を結んでいる。先生は立信の建学の精神や沿革が本学に似ていることから、この提携を提唱されました。それが新学部（政策情報学部）の創設とそのための留学生の受け入れの必要からこの提携が実現されるにいたりました。現在、多数の優秀な留学生が本学で学び、商大生に良い刺激を与えているのをみると、これも大きな貢献といえるでしょう。

先生は主要な著書9点、訳書14点、雑誌論文13点の他に実に多くの研究成果を発表されています。とりわけ、1969年に訳刊した「ゲバラ日記」が22版を重ね、35年を超えるロングセラーになっていることは特筆に値する。

最新刊は『いつまでもありと思うな！金と国』（碧天社、2003年）である。これは、日刊紙「世界日報」のコラム「ビューポイント」に月1回の割合で連載された内外時事評論の抜粋である。この著書には本学の加藤寛学長が前文を寄せておられる。

この表題は「金と国はいつまでもあると思うな」という警世の意味と先生の社会的「遺言」のつもりでつけたという。先生は、最後に「亡国の警告」として「それぞれにタガを締め直すべき秋」という句を残されている。

先生、永年のご指導ありがとうございました。これからも酒と料理と談論をよろしくお願い申し上げます。